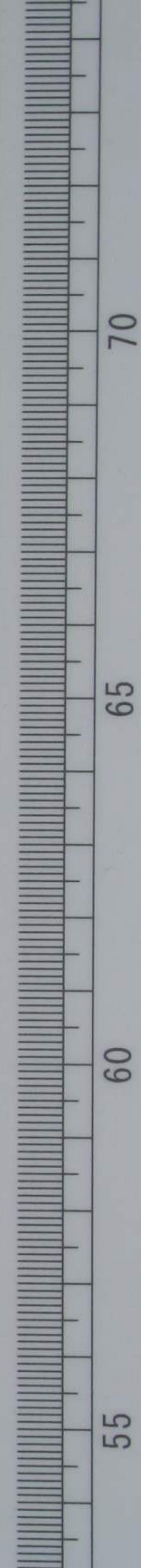
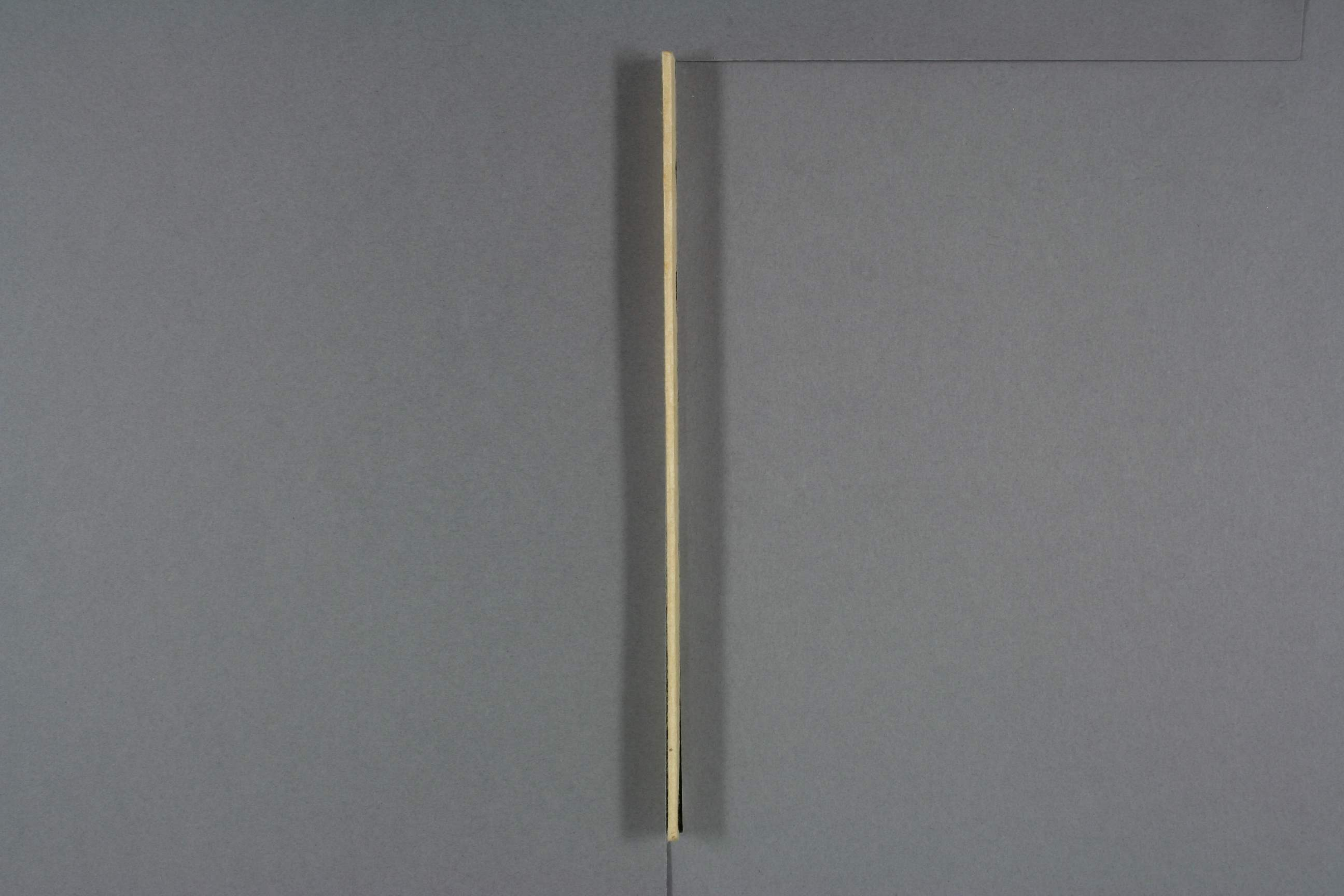
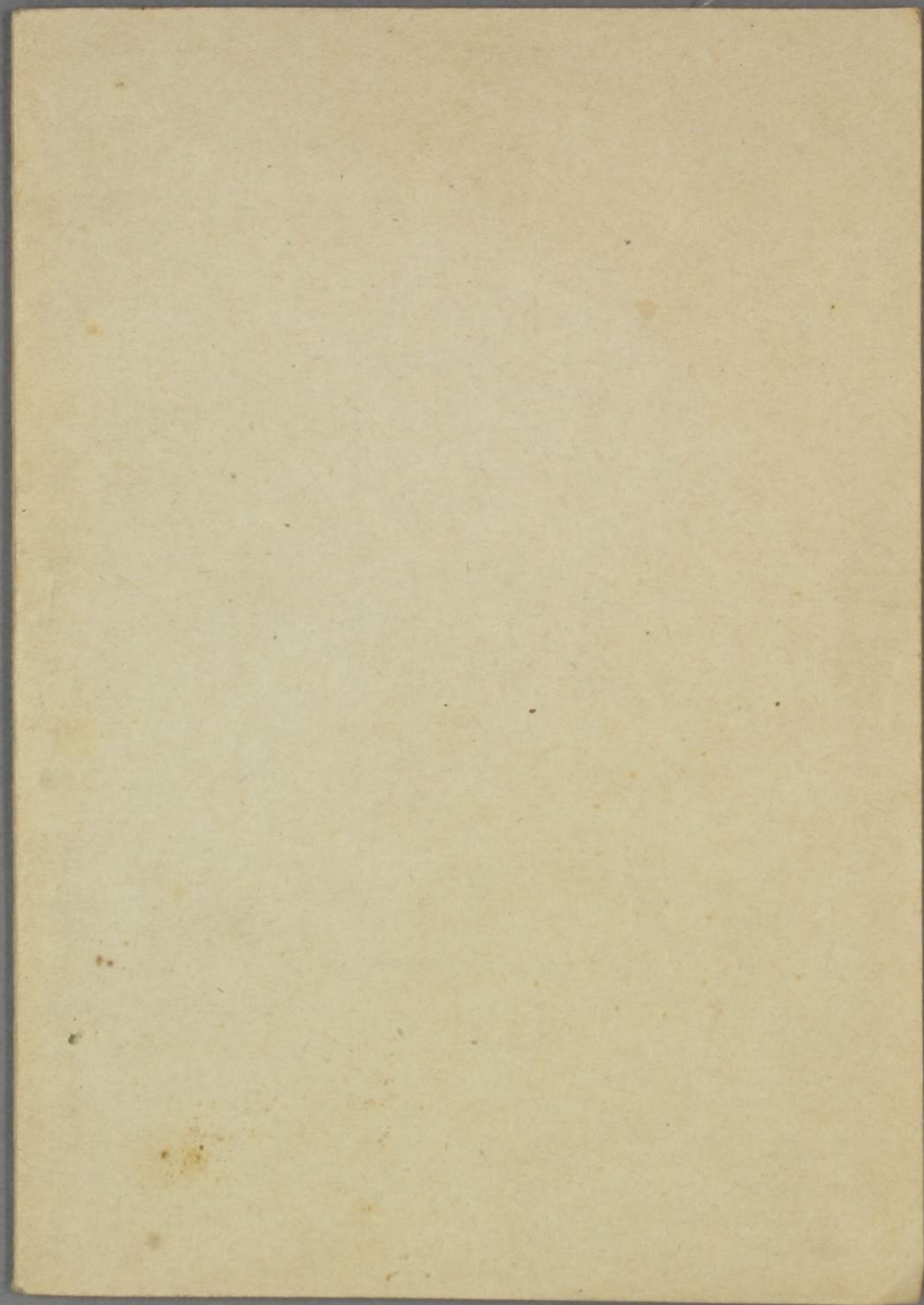


歌集  
青  
杉







伊豆大島にて詠める

櫻葉の散る目となればさわやかに海の向山見えわたるなり  
岡のべの草に秀<sup>ひ</sup>づる芒の穂やや秋あらし吹き出でにけり  
一面の陸稻畑は色づけり日影あかるく萱の穂そよく  
日にけに野分つのでりて空明し三原の煙立たずなりしか  
吹きとよむ野分榛原ひよどりの飛びたつ聲はなほ悲しけれ  
芋の葉の破れ葉大きく揺らぎ居り野分の空はただに明るし  
裏戸出でもとほり聞けば虫繁し納屋の中にも一つ鳴きたり  
こほろぎの鳴く聲とみにひそまりて庭の茂みに雨か降るらし  
さむざむと暮れて來にけりわが宿の垣根にそそぐ秋雨の音  
草まくら時雨ぞ寒さわが友のなさけの羽織いただきて着む  
しめじめと堀割道の櫻落葉朽ちたまりたり牛の足跡  
夕渚人こそ見え間<sup>ま</sup>遠くの岩にほのかに寄する白波

日の下になびく萱の穂つばらかにわが故里の丘おもひ出づ  
 かぎりなく潮騒とよむ冬の日の砂山かけを歩みつつ居り  
 砂山に夕日かければしみじみと潮風吹き來海の方より  
 夕早く潮満ちぬらし磯かけの泊り小舟に灯がともりたり  
 ゆふぐれて時雨のあめの降るなべに室ぬち寒し獨りもの食ふ  
 榛原に鴉群れ啼く朝曇り故里さむくなりけむかも  
 あかあかと圍爐裡火燃ゆれこもり居の今日も日暮れて風の音  
 海越えて富士の山嶺に雪白し木々の葉散らす雨晴れゆけば  
 冬枯の野面はだらに日影さしたまさかに飛ぶ鶉鳥のこゑ  
 木枯の風吹きさすふ夕なり机の上に洋燈をともす  
 こがらしの風静まれば大海の濃青の揺らぎただ寂しかり  
 目にとめて信濃とおもふ山遠し雪か積れる幽けき光

十二月十七日

草まぐら旅にしあれば母の日を火鉢ながらに香たきて居り  
 潮音のとよむを聞けばおぼつかな島への春となりけらしも  
 こぞの春とめ來し森の下萌にふたたび來つつ心さびしも  
 牛通ふ堀割道の夕かけに山ざくら白く散りたまりたり  
 さくら散る山裾道の夕ぐれを牛曳きて來る少女子あはれ  
 おしなべて光る若葉となりけり島山かけに居啼く鶯  
 渚原かぎりひ高し見はるかす海のおもての春日かがよふ  
 住みなれて心寂しも磯木立青葉する頃はわれ瘦せにけり  
 青葉山島山さやに啼く鳥の聲のさかりは今か過ぎなむ  
 山の根におのづからなる靄の凝りあはれと思ふ春は暮れにし  
 春深き曇りとなりぬ今日一日長根の濱の波音きこゆ

磯こえて野増のましの村の夕けぶり低くしなびく雨となるらし  
 さみだれの雨聞乏しみ出で来れば袂にさわる草伸びにけり  
 梅雨ふけの草にうつろふ日の光虫や々に鳴く聲ぞ聞ゆる  
 しめじめと梅雨のなごりの風吹けり片山道に搖るる紫陽花  
 深青葉雨をふくめる下かげにひとむら白しあぢさゐの花  
 雨ながら今日も暮れたりわが宿の裏道通ふ牛の足音  
 つくづくと爐ばたに坐る朝ひとり膝のよごれに心とまりぬ  
 蛙鳴かぬ島にし住めばこの頃のそぼ降る雨夜ふるさとを思ふ  
 月今宵まどかに照れり旅の身のけながくしあれば泪わくらむ  
 たそがれて久しとおもふ砂の上に日のほとぼりのなほ残りたる  
 わが植ゑし庭の草花咲き出でて朝な夕な眺めうれしも  
 宵々に木の間洩れ来る隣屋の灯影も馴れて夏ふけにけり。

行きかひの雲脚早き九月空をりをりにして雨を落しつ  
 残暑なほ單衣ひとへの肌はだかに汗ばめど磯の木蔭に鳴く蟬もなし  
 この山は皆水木なり並みそろふ幹のすぐ立眼にこころよき

## 三原山湯場

たまさかに木立の上をかすめ飛ぶ煙は白し天雲に似つ

## 同じく

山は暮れて海のおもてに暫らくのうす明りあり遠き蜩

## 同じく

慌しく蜩鳴けり目のもとに暮れ沈みゆく山の谷あひ  
 山岨にわづかに残る夕明りさくらの紅葉色映えて見ゆ  
 たちこむる山のさ霧は深くして杉のしづくのしとしとに落つ  
 霧深き山の道べに逢見たる炭焼の子のみめよきかなし  
 山かげのものしづけさや今日すでに蟬聲絶えしことに氣付けり

秋しぐれ降りての後に咲きつぐやダアツヤの花小さかりけり  
 今われは人もひ居つ飯鍋の泡ふく音にちどろきにけり  
 さびしさをいづべにやらむ夕波の五百重の沖に沈む伊豆山  
 熱ややに高きにたへて夕ひとり飯食む心かなしかりけり  
 ひややかに洋燈のものと薬瓶にすいと虫なく夜ふけにけり  
 あらし過ぎて日はあたりたり地響の大きくするは磯波の音  
 雨晴れの土に沁み入る日の光うつらかに聞くこほろぎの聲  
 空高く月は晴れたり荒あとの寂しき土に人の聲すも  
 さながらにあらしの後の島原を月影さやに照しつるかも  
 落ちしきる木の葉のほひいたいたしきぞの嵐に揉まれたるなり  
 女らにおくれてかへる畠道萱の穂白く夕さりにけり

三原山上

やや暫し雲影落ちて暗くなる火口の原を飛ぶ鴉あり

同じく

冬の日の低くし照れる焼原にやや砂けぶり吹き立ちにけり

同じく

かそけくも落葉吹きまろぶ音すなり焼砂原の一すみにして

同じく

焼原のむかうに青く島裏の海見えわたる心こほしく

同じく

耳とめてわれ聞きにけり遙かなる山下磯に寄する波音

同じく

久方の天のそぎへに眞壁なす信濃の嶺ろは雪かづきたり  
 草の戸に時雨るる目なりきさとして百舌鳥啼きすぐる聲の悲しかり  
 寂しさに耐へてももの焚く日ぐれ時板戸の外にしぐるる音す



仰ぎ見る空の色さへ澄みはてて木枯の風吹きにけるかも  
 風の日にけに吹きて山肌は赭くさびしくなりにけるかも  
 木枯の吹く音寂し夜ごもりに火鉢ひとつをか抱き居り  
 木枯の風吹きさすよ夜更けて月の光は照りわたりたり  
 乳ヶ崎ちかの沖べ流るる早潮のたぎちもしるく冬さりにけり  
 國山は雪降りつもるしかすがに島の椿は今さかりなり  
 冬深き日和となりぬ磯に来て一日したしむ青海の色  
 そこはかとも戀しさに出で歩む夕ひととき潮鳴の音  
 この岡の日向ぼこりに來慣れつつ冬暖かきことをうれしむ  
 目をとぢて暫らくむなし天つ日はわが額ぬかのへに沁みわたるなり

眺望

うちわたす木末に低き山かけは海のかなたの相模なるべし

述懐

父母をならび思へばとく逝きし父の面影はうすきが如し  
 あからひく日の入り方の潮曇り千重に百重に朱流れたり  
 暮れ暮れの赤き日包む潮曇りはるけき國を偲ばせにけり  
 咲きそめて幾日も経ぬに丹椿にっばきの花は木下に散りしきて見ゆ  
 雲晴れて見れば寂しき山の峯ほのぼのとして雪降りにけり  
 焚きすてし落葉の煙あははと杉の木枝にまつはりにけり  
 暖かき日影をとめて來りつる枯生のもとに莖咲くはや  
 春さらば莖を摘みておくらむと思ひしものを人はむなしき  
 春の日はうなじに暑しとぼとぼに山原道を歩みつづくる  
 春雨の晴れゆく方の沖つ空はつかに光る富士の雪かも  
 伊豆山は霞みつつありうちわたす青海原のうねりゆたかに

との曇り暮れゆく沖にいさり火の影かと思しは伊豆焼くるなり  
 さのふの雨にしめれる木の間道若葉うつくしく照り映えにけり

## 隣人の死

咳き入りし聲もとだえぬ行く春の垣しもと葉を隔てつるかも  
 灯をさげて磯のほとりに來りけり夜潮のほひしみじみとする  
 澄む月をそがひにしつつ立ち戻る渚の砂にひとつわが影  
 松蟬の聲しきりなり吹きわたる青葉の風をすがしと思ふ

## 病友と共に臥す

寝入りたる姿を見ればおのづから病み細りけむその頂うねあはれ  
 枕べのあま戸に早くあかつきの影さしそめぬ眠られぬ夜は  
 日の暮の海のおもては静けくてわが目にかかる舟一つあり  
 木下道すでにかげりて鯛の聲あわただし獨り歩むに

磯波の音もとだえし夜のしづみ洋燈の笠にとまる虫あり

ひやびやと夜ふけにけりわが宿の障子に居鳴くはたをりの聲

## 長根

わが行手鴉群れつつ荒磯の岩黒き上にあるひは飛べり

磯の上の松山こえてなびかふは廣布焼く火の煙なるらし

見渡しの海のかなたはかきくれて雨か降るらし相模嶺のあたり

夕風ぎて一平らなる海の上に歸り帆のかげつぎつぎと見ゆ

目にとめて磯のかたへの流木に鳥糞白し海曇る目を

月さよき夜頃となりぬわが宿の芋畑に來て唄うたふ子ら

今日一日こもり暮しぬ外の面ゆく人のあとも戀しかりけり

面伏せに歩みつつ見る足袋の穴わが下心つつましくあり

朝戸出のわが眼に見えて富士の山白雪照れり海のかなたに

伊豆の岬雲ふくらめりしかすがに冬の日脚の早く傾く  
 室深く日影さし入るうれしさよ残りの蠅が群なして飛ぶ  
 三原山裾の榛原うら枯れて鶉鳥のこゑを聞くべくなりぬ  
 一色に冬枯れにけりこの山の若葉せし日に來しを思へば  
 こほろぎの聲もとだえしこの夜頃時計のさざみ心にし沁む  
 湯あがりの肌あたたかき家の間の草枯道をのどに歩み來  
 天つ星滿ちかがやけり夜ふけて海よりあぐる風の冷たさ  
 かりそめの風邪長びきぬ冬の雨今日しとすと降り出でにけり  
 枕への障子にひびく波の音おもへば遠き旅の宿なり  
 きぞの夜は雨さむかりき吹く風の今日はた激し障子戸を揺る  
 しぐれ來る音まばらなり目をとぢてすなはち憶ふ故里の山  
 病みあとの弱りを持ちて家ごもる今日も日暮れて寂しかりけり

冬枯の山の木原をとよもしてただ吹きわたる風のさびしさ

寝ねぎはにふたたび見ひとおもひたるみ空の月は雲がくれにし

歳暮の感

この宿にかくて三度の年暮れぬ机の上の御ぼとけの像

踊り場の若衆ら見にと去年は行きし今年は行かず寮に寝て居り

其二

踊り場の太鼓にぎはし晴衣はれぎぬの村少女どもさそひ行くらし

其三

わが心何かしきりに哀しくて晝床のへに目をつぶり居り

其四

寝てさけば笛や太鼓の音すなりわが父母の國し戀しも

めづらしく降れる雪かも日の照りの眩しき家に一日こもりつ

雪のあと暖かくして夜もすがら屋根の雫の落つる音すも

杉の穂の高きを見れば月澄める空をわたりてゆく風のあり  
 山の樹はいまだ芽ぐまずふし照れる今宵の月夜寒けかりけり  
 春いまだ浅しとおもふ山の原月照りわたりものの香もなし  
 み空ゆく月の光は澄みながら山原低く霧らひたるかも  
 にはたづみ溢るる見ればこの朝の雨暖かくなりけるかも  
 みんなみの弘法濱にいくそ度潮鳴たちて春は来ぬらし  
 日がさせば野べの落葉も乾きつつ蜥蜴さ走る音のかすけさ  
 榛の木の花は咲けれど春いまだ寒しと思ふ土の日あたり  
 山の雲うごくを見れば春早くみんなみの風吹き来るらし  
 海原を吹き来る風は暖かしたちまちにして木の芽ひらくも  
 東の間に冬をすごして島原や榛の木立は芽ふきそろひつ

## 亡友の跡

足あとも残りてあらむこのあたり土にあまねく草はびこりぬ  
 病みあとの足力なく歩み来て野べの若草に心したしむ  
 山原や杉の若萌黄にほけて日射しほとぼる夏となりけり  
 一面の穂麥畠にあかあかと風波わたる見れど飽かなく  
 虫の聲まだいとけなし梅雨晴れの今宵月かけ草を照せり  
 降る雨に濡れつつ咲けるすひかづら黄色乏しくうつろひにけり  
 故里は苗代小田に蛙鳴く頃とおもふに今日も降る雨  
 ものうき梅雨にこもりて幾日経し今朝はからずも百合をもらひぬ  
 おもおもと梅雨のなごりの風吹けり夜目には凄き蜀黍の畑  
 日ならべて風みなみ吹く梅雨のあけ蜀黍の葉はいたぐそよぎつ  
 障子あけて風まともなる涼しさよ遠くまた近く松蟬の聲  
 天雲はいまだも深し梅雨晴れの光ひととき海を照せり

雨あらく庭の草葉に降りそそぎ降りそそぎつつ今日の日暮れぬ  
 月させば大きく光る芋の葉に馬追一つ鳴きいでにけり  
 月影は疊の上に照りにけり足さしのべて獨り安けさ  
 虫の聲一夜々々と繁くなれり人もとひ來ぬ草のとぼそに  
 生けるものつひに憐なくなりぬべし月夜もすがら蟬の聲  
 ほそぼそと命たもてり藪かけの家居日暮れて蚊の聲ぞする  
 遠空に稻妻あれやわが立てる磯の平は暮れわたりたり  
 素足もて歩むによろし濱いさごひやひやとして宵濕りせり  
 渚道行くささぎの草むらにかほそくこもる虫の聲はも  
 歸り來てひとりし悲し灯のもとに着物をとけば砂こぼれけり  
 夜に入りて野分つのれも揺れとよむ木立の上に高く澄む月  
 しづかなる夜とおもふに三原嶺の煙は高し月に映えつつ

南向くこの一間こそ嬉しけれ冬の日かげの一ぱいにさす

同歩に

うら枯の林をこえて見ゆる海こころあたりの眺めは廣し  
 日和風吹きまにまに照り光る椿の木並うつくしきかも  
 淺山のこの山かげに散りしける諸葉の色のけぢめまだあり  
 落葉する島の木原はしづけて艦ねの砲音遠くより聞ゆ  
 手をひたす岩間の潮はあたたかし何か藻草のなびきつつ見ゆ  
 家垣に目白寄り來るあさゆふべ吳竹の葉は散りそめにけり

大正九年三月上京、麹町の宿に  
 久保田先生及び藤澤實氏と會す

われひとり離れ住む日の長かりし面あはせつつ沁々おもふ

其二

雨さむみ置炬燵してこもり居りうす茶の碗をいただく我は

其 三

室ぬちに煙草のほひこもりたり雨ふる音はしづかに聞ゆ

其 四

この宿に置炬燵して一日居りまた島住みの身にかへるべし

其 五

青き海もほにめぐらして眞木茂れる島住みの幸を今し思ふも  
いつしかも櫻の花は散りすぎて夢こまかく色立ちにけり  
木がくれに小鳥啼さやむ長さ日を麥の穂はらら染め出づるなり  
森かげの道はをぐらし白々といぼたの北の散りしけるらし  
仰ぎ見る月のおもてをやや暫し夜雲のちぎれ移るひにけり  
軒近くほととぎす啼く聲に馴れてこの梅雨頃をこもり暮しぬ  
さみだれの木下の雫ひやびやし今宵はすでに更けにけるかも  
梅雨こめて目見に重たき青葉山ほととぎす啼く聲を聞ゆる

つゆ時の何か含めるさび持ちてほととぎす啼く森のあくがに  
ひとたまり磯波落ちてひろがれば白泡立ちの限り知られず

林間にて

まがなしきものをぞ見つる繁山のこの山かげに人ふたり居し

其 二

小鳥二つ逢ひつつ啼けりわがかって知らぬさはひをそこに見にけり

嶺にて

目見あげて山のすがたに向ふ時潮の音はわづらはしけれ

差木地村

外海のながめ果てなしとぼとぼに笹屋根並ぶ島の端かも  
迫り立つ岩肌は赭し見る見るに波のうねりに浸されにけり  
ひたひたに潮湛へたりさし透る光に見えて深き底岩

三原山上

霧晴れて眼おどろく青空の色かと思しは大き海原

同じく

見めぐらす新島利島伊豆相模安房の岬はいや遙かなり

直しみ歌

きのふまで常にわが見しうつくしき黒髪の子はいづち去りけむ

同じく

菜摘み籠腰にさげもて行きし子をすこやかなりと我思ひにし

述懐

うつせみの命短かし夜ふけて杜の小蟬の幾度か鳴く

墓前

露そぼつ朝の御墓に燃えさしの香かすかなり誰が参りけむ

同じく

墓のべに心あやしく立ち添ひぬ少女のすがた保てりや否

同じく

もみぢ葉のすぎにし子らが墓どころ心にしめて佇む我は

寄る波の八重しくしくにうち白む沖つ島根の曇りさびしも

目にたちて木草の緑ふけにけり今日初あらしとよもして吹く

蟬の聲にはかに乏しこの朝のあらしになびく青笹の群

夏すぎて心さびしも庭のへに稀に寒蟬鳴くばかりなり

秋の日となりしこの頃寒蟬の鳴く聲さくもいつまでならむ

ややにしてまた鳴きそめつ寒蟬のただ一つなる利聲さびしさ

寒蟬は長くは鳴かず眞日なかにただひとときはの聲透るなり

出でて見る今宵月あり遙かなる海のおもては照り白みつつ

ひややかに月夜ふけたらわが庭の草村に鳴く虫聲いくつ

仰ぎ見る夜空しづけししみじみと月の面より光流れ來

ぬば玉の夜は更けぬらし庭のへに月傾きて木影横たふ  
 戸を出でて暫しがほどをうち歩む何か穂萱の目にわづらはし  
 道のべに立てる萱の穂ひとしきり動く見えぬはた静まりぬ  
 山べには鳥むらがりて啼く聲すむかうの梢こちの木がくれ  
 みんなみの濱北の濱こもごもに潮とよむなり明日も日和か

風早時燈臺にて

目にとめて安房はるかなる燈臺のありか知られつたとなれば

人より栗を送られしに

置火もてただに焼き食む栗の實の甘さは何と故里のもの

其二

さす竹の君が賜ひし栗の實をむきつつもとな國あもひ涌く

其三

故里の和田峠路を越えゆきて君が里べに栗拾はましを

其四

君が家は片山つづき朝ごとにほたりほたりと栗落つる音

其五

夜はいまだしらしら明けの小林に入りて拾はく落栗の實を

其六

小林の下べに來ればさはにある落栗の實を籠もて拾ふ

其七

一度さへ拾ひしあとにまた拾ふ栗の實いくら袂重たし

其八

ねむごろに拾ひし栗を君食はず國遠く住む友にわかつも  
 山かげは今枯れ色のうつくしさ草根に残るいささ紅  
 冬の日は砂地の上にあたたかし蔓荊はまばらの實のしきてこぼるる  
 風しげく椿の藪を吹き揺する葉がくれの花葉あもての花



偶作

魂あへる一目の逢は百年のうき共住みになほまざるべし  
 島山に降りし白雪いく時を保つとすらひ見つつ乏しも  
 庭土の上に落ちつつたまりたる椿の花のくれなる穂せぬ  
 冬空の曇りは高しきはやかに雪をいだける伊豆の國山  
 たひの實をはぢく小鳥の音ならしわが軒屋根の上にあたりて  
 ただ一つ見えて悲しき朝船は野増の磯に寄らで過ぎゆく  
 ひとしきり耳にまぢかしとどとどと磯波よする音なだれたり  
 春ははや木の芽ゆるむにさきだちて榛の木の花青みたるらし  
 渚原ひととき波のしづまれば遠き渚の波音きこゆ  
 春の夜の月はすがしく照りにけり木の芽ひらきてやや影に立つ  
 島山の裾ひくところ幾重にも榛若葉せり見るに床しさ

偶作

すでにして春來るらしさわやかに山の目白のさへづる聞けば  
 鶯は初めて啼けりほうほけきよほうほけきよとぞ二聲啼きし  
 ゆくりなくわれ來にけらし山の上の道なだらにて椿落ちる  
 晝の間は若葉に障へし山櫻ゆふべ目に立つは寂しかりけり  
 をさな杉伸びしを見ればこの島にすみ遊ぶ身の久しくなりぬ  
 うつせみに逢見し子らや真間の野に立つかぎろひのあとかたもなき  
 島山を見ればいつくし立ち別れふたたびと來むわれならなくに  
 去なむ日は近づきにけり獨りゐても思ふにぞ泪さしぐむ  
 耳につくうつつの聲は朝雉子<sup>あさざきす</sup>とてもかかても立ち別れなむ  
 かりそめに面會すだに人の子のうら哀しさは思ひ沁むもの

卷末に

明治四十五年五月、久保田先生の選を経て、自分の歌が初めてアララギに載つてから、殆んど十年になる。この度自選歌集「青杉」を編むに就て、今までの作全部に目をとほしたが、初期の作には、採れるべきものが極めて少ない、そこで大正五年九月以前の作は全部棄てて、それ以後のものから選り出すことにした。然し最近の作になると、どうしても取捨選擇に迷ひが生ずる。従て大正十年四月以來のものは次回の歌集に收めることとして、この度は手をつけずに置いた。

それ故「青杉」一巻は大正五年秋から大正十年春まで、自分の年齢を云へば二十二才から二十七才まで、この間の作から成り立つてゐる。そして作の内容は、殆どすべてが伊豆大島の自然である。右の年間自分は大島に居住してゐたからで

ある。(大正五年秋といへば渡島後すでに滿一年を経てゐる)この集はもとゞ大島の作だけを集めるつもりではなかつたが取捨選擇の結果、自然にさうなつてしまつた。歌は果敢なく力弱きものばかりであるが、自分にとつては一首々皆なつかしい思ひ出の種類である。

歌の数はすべて二百五十八首、制作の年次に従つて配列した。装幀及び口繪は平福百穂畫伯にお願ひした。自分はこの數年來畫伯の御恩情を受けたことが實に多いが歌集發行にあたり装幀まで心配してゐたといふことは感が深い。なほこの歌集については久保田先生及び藤澤古實君から種々御配慮を受けた。古今書院主人は自分が少年時代の師である。その人が出版の勞を取つて下さるといふのも因縁が深い。忝い心でこの集を編み終へた。大正十一年一月耕平記

非賣品 (以活版代謄寫)

長野縣諏訪郡永明村三〇五番地

印刷者 郁文舎印刷所

長野六五